卯月（うづき） 第686号

むなかた

目次

第56回　若布献上　3・2
沖ノ島出土の国宝を修復　4
神宮神宝より紐解く　5
神宝館だより・造営日記　6
宗像大社歌会詠草　7
御造営奉賛者御芳名　7

よって、自然災害の多い日本。三月十一日で東日本大震災から七年が経った。また九州北部豪雨や霧島連山新燃岳の噴火。季節はずれの豪雪など日本各地で自然災害が後を絶たない。被災地では未だに避難生活を余儀なくされ不安な日々を送っている方が多い▼自然は数多の恵みを育む一方で、時に荒れ狂う。古代の人々はこの自然の摂理を熟知し自然そのものに神を見出し、畏怖畏敬の念で祀ってきた▼その祀り・祈りとは豊作のために自然の脅威にさらされない祈り。またそれに感謝する祈りが捧げられる▼近年、異常気象が全国各地で頻発し混乱をもたらしている。その中で、自然との共生や古代の人たちが抱いていた自然観に注目が集まっている▼自然そのものに神を見出す感覚、この感覚はこれからの時代私たちに大きなヒントを与えるのではないだろうか▼先人と同じ感覚を持つのは難しいかもしれないが、時代が変わろうと自然のもたらすものに対して、畏怖畏敬の念を忘れてはならない。（中）

第56回 若布献上

玄界灘の天然若布を 皇室へ献上

三月二十七日、二十八日、早春の玄界灘天然若布を賢所、天皇皇后両陛下、皇太子同妃両殿下、三笠宮家、秋篠宮家、高円宮家、常陸宮家、寛仁親王妃信子殿下へ葦津宮司、随行神職一名また、宗像漁業協同組合より高橋義則氏、河邉英二氏が宮中へ参内し、恙無く献上申し上げた。

皇室への献上は、昭和三十八年に始まり、本年で五十六回目を数える。

今年の若布の生育は順調で、二月二十日頃より地島沖にて採り始め、濃緑で磯の香りの強い良質な若布が採取され、伝統的な技法で奉製された乾燥若布が三月三日当社に納められ献上準備が進められた。

二十六日の九時五十分、本殿にて奉告祭を斎行し出社した。福岡空港では献上者をはじめ、毎年若布を運んでいただく全日本空輸（株）の方々が参列し、当社巫女より客室乗務員への手渡し式が行われ、若布は機内へ運ばれ上京した。

二十七日、献上当日午前九時三十分桔梗門より宮中へ参内。葦津宮司が若布献上の旨を言上、賢所、天皇皇后両陛下に献上申し上げた。宮中を辞した一行は皇太子同妃両殿下を始め各宮家、寛仁親王妃信子殿下へ献上申し上げ、宗像大社海洋神事奉賛会春の重儀「若布献上の儀」を無事に終えた。

厳島神社

花をつけ見頃を迎えた椿

地島は周囲 9.3 キロメートル、泊地区と白浜（豊岡）地区の 2 つの集落に 160 人程が暮らす。住民の殆んどが漁業従事者で、ワカメ、ウニ、アワビなどが特産。島内には約 6,000 本の椿が自生している。

献上用若布の袋詰め作業

地島の天然ワカメ

三月十三日、皇室へ献上する若布を例年採取している地島（じのしま）へとワカメ

漁の取材に入った。

神湊から地島行きの第一便・午前七時四十五分のフェリーに乗船、約十五分で、地島・泊漁港へと到着した。港では地島小学校の生徒四~五名が「おはようございます」と船から降りてきた一人一人に声をかけ元気な挨拶で迎えてくれた。聞けば、挨拶をしているのは島外から地島小学校に通う漁村留学生で、島内で共同生活を行い、毎朝、港で挨拶を行なっているとのこと。

ワカメ漁の取材までにはまだ早く、タクシーやバスなども無いようなので歩いて島内を巡ることに。宗像三女神を祀る厳島神社や、沖ノ島展望台、つばきロードというハイキングコースもあり、いたるところで自生する椿が花をつけ、見頃を迎えていた。

ワカメ漁は毎年、三月~五月頃まで行なわれ、近年は三月一日に解禁されており、今年も三月一日解禁となった。玄界灘と響灘の潮がぶつかり合う地島の海は肉厚で良好なワカメが育つと言う。毎年皇室に献上しているワカメは解禁前に新芽の部分を採取し特別に奉製されている。漁師たちは、ウエットスーツに身を包み、鎌を手に海へと潜り一本一本、ワカメを刈り取って行く。波や風が強い日には漁が出来ず、なぎの日を待って漁を行なう。刈り取られたワカメは漁港に降ろされ、選別、湯通し、茎取り、塩蔵などの工程を経て、パック詰めされて塩ワカメとなる。

今回、献上若布の奉製は日程が合わず取材が叶わなかったが、地島の塩ワカメ製造の現場を見せて頂いた。何気なく食べていたワカメだが、口に入るまでには、多くの人の手間や思いが詰まっている。宗像の春の絶品食材「地島天然わかめ」是非、一度お試し下さい。

湯通しされると、真っ黒なワカメが一瞬で鮮やかな緑色に

水揚げされたワカメは、一つ一つ
メカブの部分と切り分ける選定作業を行なう

湯通し後、茎の部分を一つ一つ手作業で切り取っていく

元気な挨拶で迎える
地島小学校の児童

修理完了した神宝
（上より金銅製雛形琴、金銅製雛形五弦琴、金銅製人形・金銅製雛形紡織具）

沖ノ島出土の国宝二十六件を修復

去る三月二十一日、平成二十七年より三ヵ年の保存修理を行っていた、沖ノ島出土の国宝　二十六件（二七五点）が修復を終え、輝きを取り戻し、神宝館へと返却された。

沖ノ島出土の神宝（八万点）は昭和五十六年～平成四年にかけて保存修理を行なっているが、金属製品を中心に経年劣化が進み、一部は毀損の危険性も高まっていた。また、平成十三年度に金庫から再発見され平成十五年度に国宝に追加指定された品々の中には、保存修理が行なわれていないものもあり、保存対策の必要があった。

平成二十五年から文化庁指導のもと福岡県・宗像市文化財担当者と協議を進め、修理対象となる沖ノ島出土の神宝一〇八件を選定。緊急性の高い神宝から着手する形で三期十年に及ぶ保存修理計画を策定。平成二十七年四月より第一期三ヵ年の保存修理事業が開始され、今年三月に金銅製雛形品、馬具、鉄製の冑や斧などの修理が完了した。

返却日には、修理を委託した公益財団法人元興寺文化財研究所よりセンター長・塚本敏夫氏をお呼びし、記者発表。CT画像などを用いた処理前調査、クリーニングや樹脂含浸の処理、保存台作成など三年に亘る保存処理について説明いただき、神宝の一部を報道陣に公開した。

今後も引続き第二期、第三期と保存修理を進める予定である。

修理品一覧

- 金銅製雛形五弦琴（5号遺跡出土）
- 金銅製雛形琴をはじめとする金銅製品（5号遺跡出土）
- 金銅製鞍縁金具（7号遺跡出土）
- 衝角付冑残欠（7号遺跡出土）
- 鋳造鉄斧残欠（7号遺跡出土）
- 金銅製人形、金銅製雛形紡織具（22号遺跡出土）
- 金銅製雛形銅鋺（1号遺跡出土）

神宮神宝より紐解く 6

元神宮式年造営庁技師　釆野　武朗

装束神宝奉献の経緯(三)

室町期における戦国時代約一二〇年間の正遷宮の中絶は調進資料の散逸や調製記録の混乱を招き、更には神祇官庁の退廃などにより畏れ多い事ながら質の低下した装束神宝が調進されることとなります。その後皇大神宮では天正十三年(一五八五)第四十一回式年遷宮が一二三年ぶりに行われ、豊受大神宮では永禄六年(一五六三)第四十回式年遷宮が一二九年ぶりに共に再興されますが、再興後の奉献ではそれ迄行われていた神宝使や本様使の参向が寛正三年(一四六二)の第四十回皇大神宮以降は遂に廃止となり行事官のみの参向となりました。その様ななか、調進の品目では豊受大神宮の神宝に、「御冠(おんかんむり)」「御笏(おんしゃく)」「御高機(おんたかはた)」等一八種三二点が加進され、御料調製の仕様基準である『延喜式』に記載の御料とは異なる様式の品々が奉献されます。このあと更に時代が下り江戸期になりますと、御料調製の用務は世襲制による専門技術者への「職方世襲」での調製が約二〇〇年間続き、これらの方法によって調製の伝承が細々ではありますが、その命脈が保たれることとなります。明治時代に入り明治三十一年(一八九八)に勅令第一〇二号によって殿舎の造替、装束神宝調進事務の監督官庁として「造神宮使廳(ぞうじんぐうしちょう)」の官制が布かれ、同庁内に「御装束神宝古儀調査会」と称する公式の機関が設置されることとなります。これにより大正九年(一九二〇)三月の第一回から昭和二年(一九二七)六月の第五回まで、時代の流れと共に変節を極めた御料調製のあり方を古儀に則した正しい姿形に復古すべく有識者による調査と審議が重ねられました。その調査会による答申の結果は昭和四年(一九二九)第五十八回式年遷宮における装束神宝の厳格なる調製基準を定めた仕様書と一連の詳細なる調製図面として制定されます。この辛苦を重ねた調査について造営庁の大先輩である造神宮使廳井上清技師はその記述の中で「寶物の参考品としては正倉院・帝室博物館及び官國弊社の蔵品や、個人の所蔵品に到る迄恰く實見し、又多數の参考書について詳細に之を研究し、必要に應じてはその撮影及實測圖を作製すると共に神宮司廳の職員其他有識の士を聘して種々諮問し、數回の會議を開いて愼重に審議を遂げ。先ず御物の種類・品目・數量を正し更に藝術的見地より形状・文様・材料の撰澤・施工の方法等に亘り精細な攻究を行った」と記しています。ここで制定された詳細な調製仕様はこれ以降の昭和二十八年(一九五三)の第五十九回より今回平成二十五年(二〇一三)の第六十二回まで継承されています。

御高機(豊受大神宮神宝)　神宮司庁提供

神宝館だより⑫ 八万点ノ国宝収蔵

【紙に書かない古文書3】

文字は紙に書かれるとは限らない。今回は杉板四枚に書かれた本殿造営の詳細な記録である置札（おきふだ）。現存する辺津宮本殿に納められていたもので、造営の年代・経緯についての「動かぬ証拠」である。四枚ともに天正六年（一五七八）六月朔日の日付で、造営を成し遂げた宗像大宮司氏貞の重臣八人が名を連ねる。宗像の人々の篤い信仰造営の直接史料であり、神宝館での展示再開を俟ちたい。

1. 造営置札

弘治三年（一五五七）に焼失した本殿を再建するまでの二十年間の、宗像大社を取り巻く戦国時代の厳しい政治・軍事情勢、神の御加護による仏師との出会いや、造営費用となる難破船とその積荷の獲得などを書き連ねており、「実録！本殿再建」である。

2. 棟上置札

天正五年十一月二十日に斎行された本殿上棟祭の参列者、設え、祝儀と、造営の部材費用や人夫手間賃などが書かれ、宗像郡全域の人々が協力している。

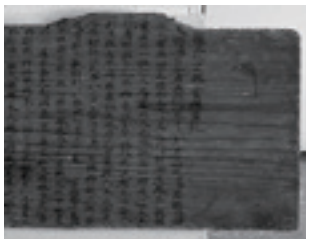
3. 寄進置札

造営費用として、銭、米、織物、刀、釘、鉄などを寄進した人々の名前を書き連ねる。また、造営中に難破船積荷を度々獲得して費用に宛てたこともわかる。

4. 遷宮置札

天正六年の遷宮祭の荘厳な本殿装飾の様子、式次第、参列者の配置などを記している。伎楽衆を大宰府から招き、能の翁舞は宗像大社に属する亀石大夫が演じているが、この時の翁面を神宝館で展示している。（河）

棟上置札


本殿造営置札

時満ちて道ひらく 造営日記㊵

中津宮本殿 亀腹を修復

県指定有形文化財（建造物）である、中津宮本殿亀腹が経年劣化のため二月上旬に修復を行なった。

中津宮本殿は平成七年度から八年度にかけて解体修理がなされており、その際亀腹修復もなされたが、二十年余りが経過し劣化が著しく修復の運びとなった。

修復は、既存亀腹の漆喰を除去した後、モルタルで下地調整を行い、新たな漆喰で表面を仕上げた。

修復前

修復後

第680回　宗像大社歌会詠草

■大西晶子選　■毎月25日〆切

歌の題「はじめ」とあれば書棚より古事記とり出しぬはじめに神あり　山﨑　公俊

題詠を求められた作者か、読んだ作品の歌なら詠み方を変えて。そこが分かると良い。

わが庭の剪定したる梅の枝に居間で花咲く二月の初め　萩原　勉

剪定した枝に命を見たのだ。〈剪定をしたる梅の枝活けおけば居間で花咲く二月の初め〉。

すこやかにこのひととせをすごすべく竹の柄杓で若水を飲む　佐々木和彦

新年の祈り。端整な歌の形だが、三句〈すごしたし〉と三句切れにすると作者が見える。

当然の如くに二月の庭に咲く梅は根にもつ蓄え見せず　森　龍子

根の太い古木の梅だろう。〈つねのごと二月の庭に梅が咲く太き根ほどに花のあらねど〉。

かも下り坂なるわがひと世秋落日にて加速せむ　池浦千鶴子

入日を見て感傷的な気分になった作者だが、まだ大丈夫。四句〈似て～〉と漢字に。

むりに強ひ食介してゐるわれなるも母に生きむの意欲は知れず　北野カズミ

悲しい介護。〈介護食無理強いすれど老い母に生きる意欲のしるしは見えず〉とした。

樽桶に酵母匂ふ蔵開きバツカス醸す潤ひの酒　秋吉　嘉範

酵母の匂いの気づきが良い、〈酵母の～〉と助詞を。下句〈酒神の醸しし酒に潤ふ〉。

眼裏に高き鉄塔と索道がわらび取りいし浦谷顕つ　山本　静子

鉄塔、索道の具体が懐かしい。〈索道と高き鉄塔が眼に浮かぶ蕨取りいし浦谷思へば〉。

振り向けば大きな夕陽山の端に睦月の街をオレンジに染む　本田エリナ

オレンジ色と夕陽が華やか。二句以下〈山の端にかかる大夕陽～染めて〉。

膝着きて草取る垣の外の声急にひそまり高笑いとなる　吉﨑美沙子

何を話しているのか不思議に思った作者、高笑いがミステリアス。初句の着くは突くが。

夕食に友の作りし白菜漬うましうましと夫といただく　大和美由紀

友人の作った白菜漬けに感謝する作者。旨さを白菜漬けの描写で表現できると良い。

鉛筆も扱い方で芯折れる消しゴムさえも消せぬブラック　早川　祥三

消せないほどの鉛筆の黒はブラック企業の暗喩か。読者に分かり易い詠み方を考えて。

◆選者詠

それぞれの立場によりて正義ありひとつならざる正義とふもの

正義とはひとつならねばゆらゆらに揺らぐ日あらんテミスの秤

第651回　俳句

蝋梅をこぼして月の食われけり　早川　祥三

御造営奉賛者御芳名

（平成三十年二月）
（順不同・敬称略）

一〇〇、〇〇〇円

宗像市　佐藤　千里

三〇、〇〇〇円

江南市　杉山　善信
名古屋市　髙宮　弘樹

一〇、〇〇〇円

越谷市　尾﨑　輝久
宗像市　岩見　貴史

五、〇〇〇円

宇部市　篠原　正行
遠賀郡　松浦　浩一
嘉穂郡　吉貝威芙紀
北九州市　津崎　健一
渋谷区　柳瀬　育代
田川市　前田　雅仁
鳥栖市　立ち飲み焼肉バル騎驢賞驢
流山市　賀来　宏和
鉾田市　小沼　俊秀
横浜市　野口勢津子

三、〇〇〇円

大阪市　福地　昭義

二、〇〇〇円

阿久根市　双津　真
生駒市　豊﨑　倫臣
大田区　大谷　行男
岡山市　竹内　安代
霧島市　迫　あや子
霧島市　迫　弘美
古賀市　杉山　篤
世田谷区　桜井　繁子
知多郡　奥村　祐司
福岡市　吉冨　功一
港　区　半澤　洋子
箕面市　青木　正樹

お知らせ

五月二十七日沖津宮現地大祭は、神職のみで祭祀を執り行うことになりましたので、本年より沖ノ島への一般参列はございません。

むなかた
卯月（うづき） 第686号

4月 まつりごよみ

1日	春季大祭	午前11時
2日	春季総社祭 引続き 高宮祭、第二宮第三宮祭 宗像護国神社春季大祭	午前11時
15日	総社月次祭 引続き 高宮祭、第二宮第三宮祭	午前11時
29日	昭和祭	午前11時
30日	沖津宮春季大祭 於＝沖津宮遙拝所 中津宮春季大祭 於＝中津宮本殿	午前 9 時 午前11時

宗像大社

編集後記

先日、海の中道はるかぜマラソンハーフの部に参加した。約一カ月の練習を重ね迎えた本番、天候に恵まれ絶好のマラソン日和となった▼十一時一〇分号砲と共に、約二〇〇〇人のランナーがスタートした▼二十一キロという長い距離は自分との闘いである。折れそうな自分の心を支えたのは沿道からの声援やともに参加した仲間の一生懸命走る姿であった▼結果は昨年の記録を七分更新できた。それにもちろん喜びを感じたが、完走した達成感のなかに、郷里山口県の出身で陸上選手・田島直人氏の言葉を思い出した▼「勝利の喜びは努力の過程にあり勝利の結果にはない」この言葉を身をもって感じたマラソン大会であった。（黒）

2018年4月1日発行（月刊）／宗像大社 〒811―3505 福岡県宗像市田島2331 電話(0940)62―1311(代) http://www.munakata-taisha.or.jp/